令和４年度 日本大学文理学部付置研究所　所員個人研究費　研究実績報告書

所属・資格　　社会学科・教授

申請者氏名　　中村　英代

<table>
<tr><td colspan="2">研　究　課　題</td><td>Well-being の社会学的考察</td></tr>
<tr><td rowspan="3">報告の概要</td><td>研究目的および研究概要</td><td>アルコールや薬物などの依存問題は主に精神医療の対象とされてきたが、依存問題を生み出す社会環境とも深い関係があるため、報告者は社会学の立場から依存症を考察してきた。具体的には、薬物依存からの回復支援施設ダルク、依存症の回復コミュニティ（12 ステップ・グループ）でのフィールドワークを行い、本年度はこれらの成果を単著として刊行した。また、これまでの研究で、依存症からの回復とは、人々にとっての幸福や人々が暮らしやすい社会の設計に通じていることが明らかになった。そこで本年度は、「回復」を含む大きな枠組みとして「Well-being(ウェルビーイング)」を設定し、虐待の問題、ポジティブ心理学などにも研究の射程を広げ、より包括的な視点からこれまでの研究を深化・発展させた。</td></tr>
<tr><td>研究の結果</td><td>依存症からの回復コミュニティを、ベイトソンの理論を補助線としながら、社会学の観点から考察した。結論として、回復コミュニティを「ひとつの変数の最大化を抑制する共同体」として描き出し、ここに人類のコミュニティのひとつの新しい可能性を見出した。その他、これまで行ってきた依存症に携わる専門家へのインタビューもまとめ、合わせて、単著としてまとめた（成果①）。その他、摂食障害を事例に女性に現れがちな心の病いをナラティヴ・アプローチの視点からまとめた（成果②）。その他、一般読者向けの商業誌でこれまでの研究成果を踏まえてエッセイを掲載するとともに（成果③）、これまでの研究を踏まえつつ嫌な気持ち（ネガティブ）にどう対処するかについて中高生向けの単著をまとめた（成果④）。</td></tr>
<tr><td>研究の考察・反省</td><td>長らく取り組んできた研究成果を単著（2022 年 5 月刊行）としてまとめることができた。依存症研究には一区切りついたので、今後は、これまでの研究を踏まえた上で、研究領域を広げていきたい。</td></tr>
<tr><td colspan="2">研究発表
学会名
発表テーマ
年月日／場所

研究成果物
テーマ
誌名
巻・号
発行年月日
発行所・者</td><td>【研究成果物　4 件】
・中村英代，2022，5 月『依存症と回復、そして資本主義』光文社新書.（成果①）
・中村英代，2022，5 月「心の病いとジェンダー」（第 15 章），日本発達心理学会編『発達科学ハンドブック第 11 巻　ジェンダーの発達科学』新曜社.（成果②）
・中村英代，2022 年 9 月「〈意志の力〉への信仰がゆらぐ時代に―「弱さ」の可能性」『群像 2022 年 10 月号』講談社.（成果③）
・中村英代，2023 年 5 月『嫌な気持ちになったら、どうする？―ネガティブとの向き合い方』ちくまプリマー新書.（成果④）</td></tr>
</table>